

平成 30 年度

人間生活学総合研究科教授内容

人間生活学専攻

東京家政大学大学院

30 シラバス 人間生活学専攻

(7)人間生活学専攻(博士後期課程)

区分	授 業 科 目	単位数	必選別	担 当 教 員	備考(シラバスページ)
心理臨床学分野	発達臨床心理学特論	2	選	客員教授 西村純一 講師 平野真理	P1
	臨床心理学特論	2	選	客員教授 近喰ふじ子	P2
				客員教授 大熊保彦	P3
	カウンセリング特論	2	選	教授 相馬誠一	P4
	心理療法特論	2	選	教授 福井至	P5
				教授 三浦正江	P6
	統計解析特論	2	選	教授 井上俊哉	P7
人間発達学分野	発達教育心理学特論	2	選	教授 平山祐一郎	P8
	発達保健学特論	2	選	教授 宮島祐	P9
				兼任講師 及川郁子	P10
	発達栄養学特論	2	選	教授 太田一樹	P11
	人類遺伝学特論	2	選	教授 高野貴子	P12
	保育学特論	2	選	教授 戸田雅美	P13
				教授 榎沢良彦	
育児支援学特論	2	選	教授 岩崎美智子 講師(兼任) 浜口順子	P15	
臨床保育学特論	2	選	教授 宮島祐子	P17	
			准教授 野口隆		
准教授 細井香力					
客員教授 岩田力					
児童教育学特論	2	選	教授 家田晴行 教授 半澤嘉博 客員教授 大越和孝	P18	
生活環境学分野	衣生活環境学特論	2	選	教授 潮田ひとみ	P19
	衣生活文化特論	2	選	准教授 沢尾絵	P20
				客員教授 能澤慧子	P21
	食環境学特論	2	選	教授 藤森文啓	P22
	住生活環境学特論	2	選	講師(兼任) 川上裕司	P23
	生物環境学特論	2	選	教授 森田幸雄	P24
	児童文化環境学特論	2	選	准教授 是澤優子	P25
講師(兼任) 佐藤宗子				P27	
児童環境学特論	2	選	教授 大澤力	P29	
生活材料学分野	衣生活材料学特論	2	選	准教授 濱田仁美	P30
				客員教授 飯塚堯介	P31
	食品材料利用学特論	2	選	教授 峯木真知子	P32
				准教授 小林理恵	P33
	客員教授 長尾慶子				
機能性食品素材開発学特論	2	選	教授 佐藤吉朗	P34	
分子生物学特論	2	選	教授 大西淳之	P35	
			客員教授 木元幸一	P36	
生活管理学分野	被服管理学特論	2	選	教授 森俊夫	P37
				客員教授 小林泰子	P38
	臨床栄養管理学特論	2	選	教授 澤田めぐみ	P39
				客員教授 市丸雄平	P40
	健康管理学特論	2	選	教授 岡純	P41
食品管理学特論	2	選	兼任講師 宮尾茂雄	P42	
生活情報処理特論	2	選	教授 松木孝幸	P43	
研究指導	特別研究		必	教授 峯木真知子 藤森文啓 井上俊哉 潮田ひとみ 榎沢良彦 大澤力 大西淳之 岡純 佐藤吉朗 澤田めぐみ 相馬誠一 高野貴子 戸田雅美 半澤嘉博 平山祐一郎 福井至 松木孝幸 三浦正江 宮島祐 森俊夫 森田幸雄 准教授 小林理恵 濱田仁美	P44

授業科目名：発達臨床心理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：西村純一・平野真理 オムニバス
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>人間の生活や人生の問題を発達の視点に基づいて理解するためのコースワークの授業として理論と方法を培うとともに、発達の理解に基づいて人間の生活や人生を支援するためのリサーチワークの基礎を身につけることを目指す。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本授業では、人間発達についての総合的理解を深めるとともに、それに基づいて人間の生活や人生の支援の方法について考える。そのために、人間の発達の起源、変化のプロセスに関する基礎的理論や時間的展望の視点について学ぶ。また、人間の発達の起源や変化のプロセスに影響する様々な要因を多角的に検討する方法論について学ぶ。これらの学びを通じて、発達の視点から人間の生活や人生の支援を考える専門性を培う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：イントロダクション</p> <p>第2回：発達理論の検証1</p> <p>第3回：発達理論の検証2</p> <p>第4回：発達理論の検証3</p> <p>第5回：発達理論の検証4</p> <p>第6回：発達研究法の検討1</p> <p>第7回：発達研究法の検討2</p> <p>第8回：発達研究法の検討3</p> <p>第9回：発達研究法の検討4</p> <p>第10回：発達支援の在り方の検討1</p> <p>第11回：発達支援の在り方の検討2</p> <p>第12回：発達支援の在り方の検討3</p> <p>第13回：発達支援の在り方の検討4</p> <p>第14回：発達支援の在り方の検討5</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：予習として文献研究1時間、復習としてノート整理1時間</p> <p>発達心理学や発達研究の方法に関する基礎的な理解。</p>			
<p>テキスト：「成人発達とエイジングの心理学」「生涯発達心理学」以上 ナカニシヤ出版</p>			
<p>参考書・参考資料等：Adult Development and Aging (7th Ed) Cengage learning</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業へのコミットメント及びレポートに基づいて総合的に評価する。授業へのコミットメント50%、文献紹介25%、研究レポート25%</p>			

授業科目名：臨床心理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：近喰ふじ子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>臨床という場で駆使できる力（心理アセスメント、心理療法など）、ならびに応用できる力（研究など）を養成することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>「臨床心理学」そのものが未だに曖昧な学問領域であるといえる。ただ、学問体系としては「基礎」と「臨床」に分けることができる。「基礎」とはすでに修士課程で学んでいる「心理査定」、「発達心理学」、「家族心理学」などの学問であり、「臨床」とは臨床現場での実践を意味すると考えられる。すなわち、「臨床」とは「基礎の応用」である。そのため、ここではあえて「基礎」を学ぶというのではなく、「基礎の応用」である「臨床」を深めていく作業を学ぶことになるのであろう。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：各自の考えている臨床心理学とは？</p> <p>第2回：臨床心理学目指すものとは？</p> <p>第3回：心理アセスメント1. 1. 投影法の基礎</p> <p>第4回：心理アセスメント2. 2. 投影法の応用</p> <p>第5回：心理アセスメント3. 3. 投影法実践（ハンドテスト、他）</p> <p>第6回：心理アセスメント4. 4. 投影法実践（芸術療法1）</p> <p>第7回：心理アセスメント5. 5. 投影法実践（芸術療法2）</p> <p>第8回：心理アセスメント6. 6. 投影法実践（模擬実践）</p> <p>第9回：心理療法1. 1. 心理療法の基礎</p> <p>第10回：心理療法2. 2. 心理療法の応用</p> <p>第11回：心理療法3. 3. 心理療法実践（家族療法1）</p> <p>第12回：心理療法4. 4. 心理療法実践（家族療法2）</p> <p>第13回：心理療法5. 5. 心理療法実践（交流分析）</p> <p>第14回：心理療法6. 6. 心理療法実践（模擬面接）</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>与えられた課題に対し、興味を持って報告できること。</p>			
<p>テキスト： 特に定めない。</p>			
<p>参考書・参考資料等：特に定めない。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>1. 安定した精神の持ち主であること 2. 程々に意欲的であること 3. 学ぶ姿勢が認められること 4. 課題に十分応えられること 5. 対人関係に問題ないこと などを要件とする。</p>			

授業科目名：臨床心理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：大熊 保彦
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>心理臨床とは、どのような行為なのか。あえて問われることが少ない暗黙の前提について、臨床心理哲学のようなものを想定して考えたい。</p> <p>また、それを基本として、研究につながる臨床心理学的な実践力を身につけることが、目標である。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>事例報告を読み、臨床の現場で起きていること、特にクライアントとカウンセラーの相互作用を中心に、心理臨床の基礎を再考する。</p> <p>また、カウンセリングは多くの場合、言語を媒介にして実践されるので、言語を軸にして心理臨床自体を考察し、言語データを用いた研究法を概観する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： 心理臨床という営み</p> <p>第2回： 事例報告を読む(1)</p> <p>第3回： 事例報告を読む(2)</p> <p>第4回： 事例報告を読む(3)</p> <p>第5回： 言語とは</p> <p>第6回： 言語と心理臨床</p> <p>第7回： 量的研究と質的研究</p> <p>第8回： 情報機器と心理臨床</p> <p>第9回： KJ法(1)</p> <p>第10回： KJ法(2)</p> <p>第11回： グラウンデッドセオリー(1)</p> <p>第12回： グラウンデッドセオリー(2)</p> <p>第13回： 査定とフィードバック</p> <p>第14回： 心理臨床における倫理的配慮</p> <p>第15回： まとめ</p>			
<p>準備学習（予習・復習等）</p> <p>報告のレジメを作成し、それをもとに討論する。</p>			
<p>テキスト 特に定めない。</p>			
<p>参考書・参考資料等 授業中に適宜指示する。</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>レジメと発表による。</p>			

授業科目名：カウンセリング特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：相馬誠一
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>カウンセリング理論の各理論について理解し、医療・教育・福祉・地域・産業での応用について把握し、実践的スキルを身につける。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>学部や修士課程で学んだカウンセリング理論と実践上の課題を深め発展させることを目的とする。再度、クライアント中心療法理論、精神分析理論、行動療法理論などの各カウンセリング理論と技法について理解する。その上でカウンセリングに関連する医療・教育・福祉・地域・産業などの分野についての応用について広く学習し、実践的スキルが身につけるように学ぶ。その上で、豊かな専門的能力を修得していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス</p> <p>第2回：クライアント中心療法理論と展開</p> <p>第3回：精神分析理論と展開</p> <p>第4回：行動療法理論と展開</p> <p>第5回：その他のカウンセリング理論と展開</p> <p>第6回：医療におけるカウンセリングの実際</p> <p>第7回：教育におけるカウンセリングの実際</p> <p>第8回：福祉におけるカウンセリングの実際</p> <p>第9回：地域におけるカウンセリングの実際</p> <p>第10回：産業におけるカウンセリングの実際</p> <p>第11回：カウンセリングワークについて</p> <p>第12回：アサーション・トレーニングについて</p> <p>第13回：エンカウンター・グループについて</p> <p>第14回：サイコドラマについて</p> <p>第15回：ロールプレイについて・まとめ</p>			
<p>準備学習：予習・発表資料作成1時間。復習1時間。</p> <p>事前にテキストを読み、発表資料を作成する。</p>			
<p>テキスト：必要に応じて、その都度配布と紹介。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>佐治守夫他著「カウンセリングを学ぶ 第2版」東京大学出版会</p> <p>平木典子他著「カウンセリングの理論」「カウンセリングの実習」北樹出版</p> <p>その他適時配布</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>予習も含めて授業でのプレゼン30%、課題に対する受け答えなどの平常点40%、レポート提出30%</p>			

授業科目名：心理療法特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：福井至
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>効果的な心理療法の要素が明確に理解できるようになり、新たな治療プロトコルの開発とその効果検証ができるようになることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>近年エビデンスに基づく心理療法の発展は著しく、RCTに基づく各種治療プロトコルの効果検証がさかんに行われている。本講義においては、進展著しい各種心理療法それぞれのパーソナリティ理論と病理論、および治療過程について、比較分析しながら、それらの差異と共通点について明確にしていく。また、研究者・高度専門職業人として活躍できるよう各種障害ごとの各治療プロトコルの効果に関するエビデンスを参考に、治療効果をもたらすための必須の要素について考察し、より効率的な治療プロトコルをどう開発していくか考えていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：効果量について</p> <p>第3回：Intention-to-treat分析について</p> <p>第4回：うつ病性障害に対する心理療法のメタ分析</p> <p>第5回：不安障害に対する心理療法のメタ分析</p> <p>第6回：PTSDに対する心理療法のメタ分析</p> <p>第7回：効果的な心理療法の共通要素 心理療法家と患者側の要因</p> <p>第8回：効果的な心理療法の共通要素 技法について</p> <p>第9回：心理療法の技法の分析 Marksの分析について</p> <p>第10回：心理療法と脳機能との関連</p> <p>第11回：NIRSによる治療効果検証の方法について</p> <p>第12回：心理療法の統合の方法について</p> <p>第13回：心理療法における効果検証における方法論上の問題点について</p> <p>第14回：COI等効果検証上の背景問題点について</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>初回到指示する。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>福井至 編著 認知行動療法ステップアップガイド 金剛出版</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>福井至 編著 行動理論と認知行動療法 培風館</p> <p>エビデンス・ベスト心理療法シリーズの各巻 金剛出版</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業への主体的参加の程度とレポート評価を50%ずつで加算評価する。</p>			

授業科目名：心理療法特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：三浦 正江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>広く心理的ストレスに関連するテーマを一つ取り上げ、それに関する論文購読を行う。これによって、特定のテーマに関する研究動向を概観し、理解を深めることが到達目標である。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>テーマを一つ設定し、それに関する国内外の研究論文を収集して講読する。最終的にはレビュー論文としてまとめる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション（授業の進め方、テーマに関する話し合い等）</p> <p>第2回：取り上げるテーマに関する話し合い</p> <p>第3回：テーマに関する研究論文の検索・収集（1）</p> <p>第4回：テーマに関する研究論文の検索・収集（2）</p> <p>第5回：テーマに関する研究論文の講読（1）</p> <p>第6回：テーマに関する研究論文の講読（2）</p> <p>第7回：テーマに関する研究論文の講読（3）</p> <p>第8回：テーマに関する研究論文の追加検索・収集（1）</p> <p>第9回：テーマに関する研究論文の追加検索・収集（2）</p> <p>第10回：追加収集した研究論文の講読（1）</p> <p>第11回：追加収集した研究論文の講読（2）</p> <p>第12回：講読論文の概要をまとめる作業（1）</p> <p>第13回：講読論文の概要をまとめる作業（2）</p> <p>第14回：レビュー論文の執筆作業（1）</p> <p>第15回：レビュー論文の執筆作業（2）</p>			
<p>準備学習（予習・復習等）</p> <p>事前に取り上げたいテーマについて考えてくること。また、心理学に関するレビュー論文を複数本購読しておくこと（テーマは何でもよい）。</p>			
<p>テキスト</p> <p>特になし</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>授業中に必要に応じて紹介する</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>授業態度及び提出物によって評価する。</p>			

授業科目名：統計解析特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：井上俊哉
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>有審査論文において適切な解析手法を選び適用できるようになることが授業の到達目標である。そのために、統計学の基礎概念を確実に修得し、代表的な解析手法について学ぶ。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>統計学の基礎をなす概念を学んだ後、多くの研究で用いられる代表的な手法について学んでゆく。Excel, R, SPSSなどのコンピュータソフトウェアの利用についても取り上げる予定である。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：統計学の基礎（1）：連続変数と離散変数／平均／分散／標準偏差／z得点</p> <p>第2回：統計学の基礎（2）：共分散／相関係数／回帰</p> <p>第3回：統計学の基礎（3）：図による表現／コンピュータソフトウェアについて</p> <p>第4回：標本分布を理解する（1）：サンプリング／2項分布</p> <p>第5回：標本分布を理解する（2）：平均の標本分布／正規分布</p> <p>第6回：検定を理解する（1）：2項分布を利用した検定／p値／有意水準</p> <p>第7回：検定を理解する（2）：平均の検定／t分布</p> <p>第8回：平均値差の検定：t検定</p> <p>第9回：分散分析（1）</p> <p>第10回：分散分析（2）</p> <p>第11回：そのほかの検定：ノンパラメトリックな方法／カイ2乗検定／相関の検定</p> <p>第12回：重回帰分析</p> <p>第13回：ロジスティック回帰分析</p> <p>第14回：主成分分析・因子分析</p> <p>第15回：判別分析・クラスタ分析</p>			
<p>準備学習：</p> <p>毎回の授業の学修内容について、次回の授業までに要点をまとめて提出する。</p>			
<p>テキスト：西村純一・井上俊哉「これから心理学を学ぶ人のための研究法と統計法」ナカニシヤ出版 ISBN978-4-7795-0998-8</p>			
<p>参考書・参考資料等：足立浩平「多変量データ解析法—心理・教育・社会系のための入門」 ナカニシヤ出版 ISBN978-4779500572</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>毎回の授業への参加状況：50%，レポートあるいは小テストの成績：50%</p>			

授業科目名：発達教育心理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：平山祐一郎
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>①記述統計、基礎的な推測統計について理解する。②子どもの発達に関して、記述統計あるいは基礎的な推測統計から理解することができる。③子どもの教育に関して、記述統計あるいは基礎的な推測統計から理解することができる。①～③を到達目標とし、①～③をもとに、幅広い観点から子どもの発達や教育について論じることをテーマとする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人間生活学専攻の学位授与の方針に基づき、「発達教育心理学特論」では、的確に子どもの発達を理解し、その上で、どのように適切な教育を行うかについて、心理学的に考える。具体的には、①データをもとに子どもの発達（成長や成熟等）を読み取り、②それを論理（理論）的に理解し、③様々な要素の因果関係を推測しながら、有効な教育（指導・支援）の在り方を検討する。心理学的な観点を中心とはするものの、身体発達との関連や社会状況の分析など、学際的な視点の広がりも持ちながら、講義をし、議論を行っていく。初回に詳細な説明を行う。なお、受講者数・受講者状況・受講者ニーズにより、概要と計画を変更することがある。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：「データをもとにした議論」に関する講義（基礎的内容）</p> <p>第3回：「データをもとにした議論」に関する講義（発展的内容）</p> <p>第4回：「心理学的観点」とは何か（基礎的講義）</p> <p>第5回：「発達心理学的観点」とは何か（基礎的講義）</p> <p>第6回：「教育心理学的観点」とは何か（基礎的講義）</p> <p>第7回：第1回から第6回までのまとめと解説</p> <p>第8回：子どもの発達と教育に関するデータ収集Ⅰ（乳幼児期編）※図書館にて</p> <p>第9回：第8回で得られたデータの分析と議論</p> <p>第10回：子どもの発達と教育に関するデータ収集Ⅱ（児童期編）※図書館にて</p> <p>第11回：第10回で得られたデータの分析と議論</p> <p>第12回：子どもの発達と教育に関するデータ収集Ⅲ（青年期編）※図書館にて</p> <p>第13回：第12回で得られたデータの分析と議論</p> <p>第14回：第8回から第13回までのまとめと解説</p> <p>第15回：総まとめと質疑応答</p>			
<p>準備学習：各回の授業後に、①授業内容の要約、②次の授業までの課題、という2つの要素からなるミニレポートを課すので、毎回、提出すること。※週3時間程度の学習。</p>			
<p>テキスト：使用予定はないが、必要が生じた場合、授業の中で連絡する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：授業の中で適宜提示して行く。</p>			
<p>学生に対する評価：次の2点で評価する。①議論への参加状況50%、②レポート等課題 50%、評価に関連するフィードバックは、授業内で適宜行う。</p>			

授業科目名：発達保健学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：宮島祐
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生物としてのヒトを理解できる。子どもの発達という視点を持って社会における人としての存在について考察できる。人文系の受講者においては理系科学の視点を理解できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>慢性疾患や心身障害のある子どもたちの生物学的特性を中心に、その日常生活に関わる保健や年齢を重ねていくときに生ずる併発障害などについての文献購読を行う。さらに受講者によっては、その研究課題に即した文献についても、購読を行い、科学的な視点からの議論を展開する。子どもの発達と保健に関する問題についての考察が主たる課題であるが、議論を通して科学的な視点をもつことの重要性を強調する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：受講者の論文課題との関連を考慮した文献の選択。</p> <p>第2回：文献購読A、その文献を選択した理由。内容の紹介。</p> <p>第3回：文献購読A-1、文献Aの引用文献から。</p> <p>第4回：文献購読A-2、文献A-1の引用文献から。</p> <p>第5回：文献購読（英文）B、その文献を選択した理由。内容の紹介。</p> <p>第6回：文献購読（英文）B-1、文献Bの引用文献から。</p> <p>第7回：2～6回の受講者の課題との関連につき討議。</p> <p>第8回：文献購読C、その文献を選択した理由。内容の紹介。</p> <p>第9回：文献購読C-1、文献Cの引用文献から。</p> <p>第10回：文献購読C-2、文献C-1の引用文献から。</p> <p>第11回：文献購読（英文）D、その文献を選択した理由。内容の紹介。</p> <p>第12回：文献購読（英文）D-1、文献Dの引用文献から。</p> <p>第13回：8～12回の受講者の課題との関連につき討議。</p> <p>第14回：まとめ①、子どもの発達に関する概説。</p> <p>第15回：まとめ②（総評）及び、受講者の博士論文の概略を発表、討議。</p>			
<p>準備学習：</p> <p>博士論文テーマの選択理由と研究背景を5分間発表できるようまとめておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>なし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>特になし。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点30%、文献の読解力30%、相互の議論20%、レポート20%。</p>			

授業科目名：発達保健学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：及川郁子
<p>授業の到達目標及びテーマ 学際的視点に立って子どもやその家族のもつ発達、健康上の問題を解決するための支援方法や研究方法について探究する。</p>			
<p>授業の概要 研究課題に関連する概念や理論、研究方法について文献講読を通して理解を深めるとともに、保健・医療の場における子どもたちを生活者として捉え、子どもたちと支援者を取り巻く現状分析を行い、自らの専門領域における研究課題の位置づけを明確にする。また、研究課題によっては予備的研究を通して研究枠組みや理論基盤を明確化していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション：コースワークの説明</p> <p>第2回：概念分析、文献のクリティークについて</p> <p>第3回：文献検索1</p> <p>第4回：文献検討1－1：概念分析</p> <p>第5回：文献検討1－2：概念分析</p> <p>第6回：文献検討1－3：概念分析に関する討議</p> <p>第7回：文献検索2</p> <p>第8回：文献検討2－1：研究方法論（量的研究）</p> <p>第9回：文献検討2－2：研究方法論（質的研究）</p> <p>第10回：文献検討2－3：研究方法に関する討議</p> <p>第11回：研究課題と専門領域における現状分析</p> <p>第12回：研究課題と専門領域における位置づけの検討</p> <p>第13回：研究計画書の作成にむけて：研究枠組みについて</p> <p>第14回：研究計画書の作成にむけて：理論基盤について</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：研究課題に関連する文献を専門領域のみならず関連領域を含めて検索しておく</p>			
<p>テキスト：特に指定しない</p>			
<p>参考書・参考資料等：適宜紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：討議資料の作成と発表70%、討議への参加度 30%</p>			

授業科目名： 発達栄養学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：太田一樹
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>人は一生を通じて身体的にも精神的にも変化をしていく。本授業では、各々のステージにおける生体機能の変化について学び、それぞれのステージに必要とされる栄養並びに栄養障害について理解することで、発達栄養学に関する深い学識と理解を有するようになることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>妊娠期から高齢期までのどの過程においても、栄養の過不足は人体に様々な影響を及ぼす。例えば母体の栄養状態は胎児に大きく影響する。また、高齢化社会に伴い、高齢期の栄養の過不足についても重要性が増している。本授業では、それぞれのステージにおける生体の機能と栄養の重要性について理解するとともに、栄養障害について論理的に考えていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：成長・発達・老化と栄養（総論）</p> <p>第2回：妊娠期の生理的特徴と栄養・栄養障害</p> <p>第3回：授乳期の生理的特徴と栄養・栄養障害</p> <p>第4回：新生児期・乳児期の生理的特徴</p> <p>第5回：新生児期・乳児期の栄養</p> <p>第6回：新生児期・乳児期の栄養障害</p> <p>第7回：成長期の生理的特徴</p> <p>第8回：成長期の栄養</p> <p>第9回：成長期の栄養障害</p> <p>第10回：成人期の生理的特徴</p> <p>第11回：成人期の栄養</p> <p>第12回：成人期の栄養障害</p> <p>第13回：高齢期の生理的特徴</p> <p>第14回：高齢期の栄養</p> <p>第15回：高齢期の栄養障害</p>			
<p>準備学習：</p> <p>授業前に文献を読み、要旨を作成してこるこ</p>			
<p>テキスト：</p> <p>テーマに応じて、文献や参考書を紹介する</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>なし</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点10%、レポート30%、試験60%</p>			

授業科目名：人類遺伝学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：高野貴子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>人を対象とした遺伝学の基礎知識と遺伝性疾患をもつ子どもについての理解を深める。その子どもたちと家族への支援方法を考え、実践することができる人材育成を目指す。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>子どもの発達の過程を遺伝学的観点から捉えることを教示する。受精から胎児期、出生、乳幼児期から思春期にいたる成長と発達に、遺伝や環境が及ぼす影響を学ぶ。遺伝的要因と、それによる疾病について学び、それらを調べる方法を学習する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： イントロダクション、遺伝・人類遺伝学・臨床遺伝学とは</p> <p>第2回： 家系図、ゲノム、遺伝子</p> <p>第3回： 染色体、男の子と女の子が生まれるしくみ、染色体分析の実際</p> <p>第4回： 染色体異常</p> <p>第5回： 染色体異常症や先天異常を持つ子ども</p> <p>第6回： 単一遺伝子疾患（メンデル遺伝病）</p> <p>第7回： 多因子遺伝とその疾患</p> <p>第8回： エピジェネティクス、インプリンティング疾患</p> <p>第9回： 体細胞遺伝学、がん</p> <p>第10回： 遺伝カウンセリング</p> <p>第11回： 出生前診断とその問題点</p> <p>第12回： 遺伝医学と生命倫理</p> <p>第13回： ふたごの遺伝</p> <p>第14回： プレゼンテーションの準備</p> <p>第15回： プレゼンテーションとまとめ</p>			
<p>準備学習：（予習1時間）テキストの関連項目を読んでおく。（復習1時間）ノートの整理。</p>			
<p>テキスト： 「改訂第5版 遺伝医学への招待」南江堂 「新版 絵でわかるゲノム・遺伝子・DNA」講談社</p>			
<p>参考書・参考資料等：授業内で紹介する。 「わかりやすい臨床遺伝学」医歯薬出版</p>			
<p>学生に対する評価：予習・復習（20%）、授業内討論と発表(60%)、レポート(20%)</p>			

授業科目名：保育学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：榎沢良彦・戸田雅美 オムニバス
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>大学院後期博士課程人間生活学総合研究科人間生活学専攻における保育学領域についての高度な専門知識を修得するためのコースワークの授業として及び高い研究能力を身に付けるためのリサーチワークとして保育学特論を講じる。到達目標は以下の事項である。</p> <p>①子どもと保育者の根本的関係を論理的に説明できる。</p> <p>②保育者の子ども理解の妥当性を論理的に説明できる。</p> <p>③保育実践を規定する条件を論理的に説明できる。</p> <p>④保育を取り巻く状況を分析しその課題を明確にできる。</p> <p>⑤保育実践を論理的に深く考察できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>保育の現場において高度な専門的職業人としてないし新たな課題について高度な研究を行うためには保育の根源について理解し、保育実践を考察する力を身に付ける必要がある。そこで、この授業においては「保育」とは何かを理解し、その上で、現在の保育実践の在り方と課題を検討することを通して、新たな課題を解決できる優れた研究能力と専門職業人としての高い実践力を修得する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(榎沢良彦/8回) 「保育とは何か」という最も根本的な問いに迫る議論について理解を深める。</p> <p>(戸田雅美/7回) 現在の保育の具体的な在り方について、具体的な保育の実践事例を検討することを通して学ぶ。また、現在の保育現場が抱えている課題等についても検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション・子どもと保育者の相互性（榎沢）</p> <p>第2回：保育実践における理解（1）：保育者の子ども理解の構造（榎沢）</p> <p>第3回：保育実践における理解（2）：実践的理解の基盤と基礎付け（榎沢）</p> <p>第4回：子どもと保育者の関わりの基盤（榎沢）</p> <p>第5回：保育者への生成（榎沢）</p> <p>第6回：保育者の自明性（榎沢）</p> <p>第7回：子どもと保育者の共生（榎沢）</p> <p>第8回：保育者の両義性・まとめ（榎沢）</p> <p>第9回：保育実践の具体的なあり方～遊び（戸田）</p> <p>第10回：遊びとは何か～遊び論と保育における遊び（戸田）</p> <p>第11回：保育実践の具体的なあり方～生活（戸田）</p> <p>第12回：保育実践の具体的なあり方～環境を通しての保育（戸田）</p> <p>第13回：保育実践の具体的なあり方～子どもへの援助の実際（戸田）</p> <p>第14回：保育実践の具体的なあり方～子どもの育ちをどうとらえるか（戸田）</p> <p>第15回：保育を取り巻く現代的課題への対応の実際及びまとめ（戸田）</p>			

30 シラバス 人間生活学専攻

準備学習：

各回のテーマに関して文献を調べ検討したい問題を考える。（予習・90分）

授業内容を整理し、そこから派生する問題について考察する。（復習・90分）

テキスト：なし

参考書・参考資料等：随時、資料を配付する

学生に対する評価

各回の課題とそれに基づく議論への参加：40% 2回の課題レポート（講評する）：60%

授業科目名：育児支援学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：岩崎美智子・ 浜口順子 オムニバス
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>現代社会における育児支援の意義と役割・機能を理解し、保育者が有すべき専門的な知識や実践力について多角的に検討する。育児支援担当者として解決すべき課題を探究できるような保育者の専門性について、議論しながら考察を深める。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>現代社会における育児支援の必要性と意義について根本から問い直しながら、保育者の専門的知識・技術・倫理や問題解決力について多角的に考察する。保育所・認定こども園等における保護者支援とともに地域子育て支援においても検討を加え、新たな課題を探究できる優れた学識と研究能力を修得する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(浜口順子/第1回～第7回) 育児支援の意義とその役割・機能を検討する。また、保育所・認定こども園や地域における育児支援を具体的な実践事例を通して理解し、討議を重ねながらその内容と方法を検討する。</p> <p>(岩崎美智子/第8回～第14回) 家族が直面している問題の検討と、援助者として保育者が感じる困難や感情労働を育児支援の観点から考察する。</p> <p>(浜口・岩崎/第15回) これまでの講義をふまえて育児支援の今後と保育者の専門性について考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：人間の育児、動物の育児</p> <p>第2回：日本における育児の考え方の変遷（戦前）</p> <p>第3回：日本における育児の考え方の変遷（戦後）</p> <p>第4回：子育ての現代的課題 ～新聞やネットに報道される子育て問題～</p> <p>第5回：海外の育児支援はどのようなものか</p> <p>第6回：日本の育児支援の特質を考える</p> <p>第7回：育児支援の多様な視点（社会、心理、福祉、教育）</p> <p>第8回：現代家族が直面する諸問題</p> <p>第9回：親子支援の実際—シングルペアレントファミリーへの支援</p> <p>第10回：親子支援の実際—外国につながる子どもと家族への支援</p> <p>第11回：「難しい親たち」への支援</p> <p>第12回：援助すること—相互行為と関係性</p> <p>第13回：援助することの難しさ—感情労働の視点から</p> <p>第14回：支える人を支えるには</p> <p>第15回：育児支援及び育児支援学の展望</p>			
<p>準備学習：予習1時間、復習1時間</p> <p>予習として、各自が問題意識をもち「育児支援」に関連のある文献を読んで考察を深めておくこと。</p> <p>復習として、授業での議論をノートに整理する。</p>			

30 シラバス 人間生活学専攻

テキスト：

特に指定しない。随時資料等を配布する。

参考書・参考資料等：特に指定しないが、随時参考文献等を紹介する。

学生に対する評価：

参加態度・授業内発表等30%、予習・復習30%、課題・レポート40%。予習・課題に対しては、授業中に講評する。

授業科目名：臨床保育学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：宮島祐、野口隆子、細井香、岩田力 オムニバス
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>大学院博士後期課程、人間生活学専攻として、履修院生の専門領域のみではなく、総合的学際的視野にたつ人材の養成に寄与すべく、臨床保育学という、従来の保育・教育領域を基盤とし、保育現場で体験する可能性のある様々な個別の問題にも対応できるという、より臨床的な視点を持った学問領域の構築にも関われる能力、学識を得る。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>4名の教員によるオムニバス形式である。一人ひとりの子どもに向き合う保育・教育を臨床保育と捉え、その考え方を築いていくための基礎的な知識を涵養するため、各教員の専門領域から、最新のトピックスを交えて講義を行うとともに、履修院生の経験、考え方も発表する形で双方向的な授業を行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション（宮島、細井、野口、岩田）</p> <p>第2回：エビデンスに基づく保育① ヘルスプロモーション（細井）</p> <p>第3回：エビデンスに基づく保育② 保育環境（細井）</p> <p>第4回：エビデンスに基づく保育③ 虐待予防（細井）</p> <p>第5回：子どもの発達と社会の変化―発達の諸側面と縦断研究（野口）</p> <p>第6回：認知能力と非認知能力の発達（野口）</p> <p>第7回：発達と教育① 幼児期から児童期の教育とその移行（野口）</p> <p>第8回：発達と教育② 保育の質をめぐる動向（野口）</p> <p>第9回：定型発達児の乳幼児期の里程碑について（宮島）</p> <p>第10回：神経発達症群（発達障害）に至る歴史の変遷を知る（宮島）</p> <p>第11回：神経発達症群（発達障害）の乳幼児期の行動特性（宮島）</p> <p>第12回：アレルギー疾患概説① アレルギーとは（岩田）</p> <p>第13回：アレルギー疾患概説② アトピー性皮膚炎等（岩田）</p> <p>第14回：アレルギー疾患概説③ 食物アレルギー等（岩田）</p> <p>第15回：まとめ（宮島、細井、野口、岩田）</p>			
準備学習：特になし			
テキスト：特になし			
参考書・参考資料等：各教員より指示			
<p>学生に対する評価：学生に対する評価：予習・復習の有無20点。諮問に対する受け答えなどの平常点40点。課題に対するレポート提出40点</p>			

授業科目名：児童教育学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：家田晴行・半澤嘉博・ 大越和孝 オムニバス
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○小学校教育における歴史的変遷と課題を的確にとらえることができる。 ○小学校教育のあるべき姿を多面的にとらえ、提案することができる。 ○小学校児童の発達段階をふまえ、多面的に理解することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>(概要) 時代の流れの中で、児童の教育はどのように変遷したかを振り返るとともにあるべき児童教育の姿を多面的な視点から考察する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(大越和孝/1～5回) 小学校教育においてどのような改革がなされようとしているのか、それはどのような理由からかを考察する。</p> <p>(家田晴行/6～10回) 実際の小学校現場を観察、分析することにより、小学校教育の望ましい姿を考察する。</p> <p>(半澤嘉博/11～15回) 児童理解、児童の発達にもつづいた指導方法を特別支援の視点も取り入れながら考察する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：小学校教育の歴史的変遷について、資料をもとに考察する。</p> <p>第2回：歴史的変遷をふまえた現在の小学校教育について考察する。</p> <p>第3回：個性重視の教育のための課題と方策を考察する。</p> <p>第4回：授業改善のための課題と方法を考察する。</p> <p>第5回：基礎・基本の徹底を図るための授業のあり方を考察する。</p> <p>第6回：小学校現場における授業研究の実際について考察する。</p> <p>第7回：授業研究における観察・分析の視点と方法について考察する。</p> <p>第8回：授業研究(VTR)における事例を児童の活動を中心に分析し考察する。</p> <p>第9回：授業研究(VTR)における事例を分析し教師の活動を中心に考察する。</p> <p>第10回：授業の進め方や教材の分析の仕方を通して新しい授業のあり方を考察する。</p> <p>第11回：発達障害の特徴に応じた授業のあり方を考察する。</p> <p>第12回：一斉指導における個別の支援のあり方と評価の仕方を考察する。</p> <p>第13回：諸外国における特別支援教育の方策を調べ、最新の指導法について考察する。</p> <p>第14回：特別支援教育支援員等との連携による授業展開のあり方を考察する。</p> <p>第15回：リソースルーム(特別支援教室)を活用した個別支援のあり方を考察する。</p>			
<p>準備学習：VTRの視聴をあらかじめ行い、自身の観点による分析を行っておく。(そのレポートをもとに討論を行う。)</p> <p>共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の現状(報告)(文部科学省、中教審報告)(平成24年7月23日)を読んでおくこと。</p>			
<p>テキスト：特になし</p>			
<p>参考書・参考資料等：VTRやプリント等は必要に応じて用意する。</p>			
<p>学生に対する評価：課題についてのレポート、発表、討議などで総合的に行う。</p>			

授業科目名：衣生活環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：潮田 ひとみ
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>健康、安全、快適な衣生活をめざし、生活の質を向上させるような、衣生活環境に関する最新の知見について理解できるようになる。また、これらを解明するために必要な衣服素材の熱・水分移動特性、力学特性といった基礎的理論について理解できるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>衣服着用時の快適感を構成する要因を人間－衣服－環境系ととらえ、人間と衣服、衣服と環境、人間と環境といった視点から分析する。快適な衣生活を送るための要因、安全な衣生活を送るための要因、健康な衣生活を送るための要因について、新着文献等を参考にしながら概説し、衣生活の向上について考察する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：衣服の着用快適感を構成する要因（1）衣服素材の力学的特性</p> <p>第3回：衣服の着用快適感を構成する要因（2）衣服素材の熱移動特性</p> <p>第4回：衣服の着用快適感を構成する要因（3）衣服素材の水分移動特性</p> <p>第5回：衣服の着用快適感を構成する要因（4）衣服圧の測定方法</p> <p>第6回：衣服の着用快適感を構成する要因（5）衣服圧の評価方法とデザインへの適用</p> <p>第7回：衣服の着用快適感を構成する要因（6）衣服の肌触りの測定方法</p> <p>第8回：衣服の着用快適感を構成する要因（7）衣服の肌触りの評価方法</p> <p>第9回：衣服の着用快適感を構成する要因（8）着用快適感の測定方法と評価方法</p> <p>第10回：衣環境の評価（1）ヒトの感覚による官能検査法</p> <p>第11回：衣環境の評価（2）モデルによる評価法</p> <p>第12回：衣環境の評価（3）数値シミュレーションによる評価法</p> <p>第13回：衣環境の評価（4）衣環境と健康</p> <p>第14回：衣環境の評価（5）衣環境と安全</p> <p>第15回：総括</p>			
<p>準備学習（予習・復習等）</p> <p>各授業の終りに次回授業への準備テーマを指示する。（調査、レポート作成5時間）</p>			
<p>テキスト</p> <p>教員が英語文献を準備する。</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>授業の該当回で、必要に応じて呈示する。</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>授業中の討論への参加状況（50%）・レポート（50%）。</p>			

授業科目名：衣生活文化特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：沢尾 絵
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>服飾・染織品に関する歴史的資料について、解説・分析を行い、服飾史の立場から考察できる。また、この方法論を、自身の新たなテーマに応用できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>歴史上に確かに存在した服飾やこれを形作る染織品は、人が自らの手によって作り出したものであり、その時代の社会状況や生活者の立場・嗜好を顕著に表している。実在した服飾・染織品、人々の衣生活、これを取り巻く社会状況等を広く文化史的に捉える研究を実践するために、本講義では江戸時代前期の染織品をテーマとし、さまざまな視点から考察し、論じていく。まずは既存の研究による通説を、資料と共に正しく理解し、検証する。その上で、新たな研究の核となり得る資料を提示し、内容の解説・分析から資料の評価、同時代の資料の再検討の方法、その意義、歴史的視点を踏まえた文化史的なアプローチの方法論について述べる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：近世の服飾・染織史研究① 小袖服飾の変遷</p> <p>第2回：近世の服飾・染織史研究② 小袖服飾の文様と染織技法</p> <p>第3回：江戸時代前期の服飾研究の特色と課題</p> <p>第4回：越後屋呉服店の社会的役割と服飾研究の位置づけ</p> <p>第5回：呉服史料研究①『染代覚帳』・『宗感覺帳』書誌学的研究</p> <p>第6回：呉服史料研究②『染代覚帳』染色名称の検討</p> <p>第7回：呉服史料研究③『染代覚帳』分析</p> <p>第8回：呉服史料研究④『宗感覺帳』染織名称の検討</p> <p>第9回：呉服史料研究⑤『宗感覺帳』分析</p> <p>第10回：服飾資料による検討①小袖雛形本</p> <p>第11回：服飾資料による検討②風俗画</p> <p>第12回：服飾資料による検討③西鶴作品</p> <p>第13回：服飾資料による検討④染色技法書、商品学書他</p> <p>第14回：江戸時代の商品価格と人々の経済観念 検討のための方法論</p> <p>第15回：呉服史料研究総括</p>			
<p>準備学習：</p> <p>テーマに沿って配布する資料を事前に読んでおく。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>特になし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>必要に応じて紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常授業への取り組み (60%) 準備・レポート (40%)</p>			

授業科目名：衣生活文化特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：能澤慧子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>歴史上の流行現象からその時代の「衣」にかかわる心性を分析、考察する態度と方法を身につける。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>「衣」は人間生活の物心両面の環境をなす重要な要素の一つである。ここではその心的環境、言い換えるならば「心性 (mentality)の要素としての「衣」が生み出す文化的な事象を主題とする。なかでも各時代の心的環境を端的に表す歴史上、ないしは現代社会の「流行現象」をいくつか取り上げ、可能な限り同時代的資料に基づいて、「衣」にかかわる「心性」について考察する。またそこからそれぞれの「流行現象」を生じさせた社会についての理解を深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：モードの誕生 (1) 中世末期の社会</p> <p>第2回：モードの誕生 (2) 中世末期のモード</p> <p>第3回：男子服モードと社会 騎士の服装</p> <p>第4回：男子服モードと社会 宮廷人の服装</p> <p>第5回：男子服モードと社会 軍服</p> <p>第6回：男子服モードと社会 市民服</p> <p>第7回：女子服モードと社会 宮廷人の服装</p> <p>第8回：女子服モードと社会 市民服 (19世紀)</p> <p>第9回：女子服モードと社会 市民服 (20世紀)</p> <p>第10回：スポーツウェアと社会 (男性)</p> <p>第11回：スポーツウェアと社会 (女性)</p> <p>第12回：ニードルワークと社会 (手芸)</p> <p>第13回：ニードルワークと社会 (裁縫)</p> <p>第14回：購買の時代</p> <p>第15回：ブランドの時代</p>			
<p>準備学習：</p> <p>授業毎に紹介・配布する次回の授業用資料を通読する。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>特に定めていない。必要に応じてプリントを配布。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>参考書を随時紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常授業、レポート。</p>			

授業科目名：食環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：藤森文啓
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>食糧の生産・自給率は人口問題、環境問題、経済等と密接な関係がある。すなわち食環境学を学ぶためには学際的な知識が必要であるばかりではなく、それぞれを関連付けた思考が要求される。そこで本特論では各論としての人口問題、環境問題、エネルギー問題などを理解したうえで、最終的には総合的な考察ができることを目指す。</p>			
<p>授業の概要 地球人口は増加の一途をたどり、今後25年後には90億人に達すると言われている。その中で問題となるのは食糧・エネルギーである。糖は食糧としての利用以外にエネルギー生産用にも使われており、食糧生産とエネルギー生産は互いに密接な関係にある。このバランスを崩すことなく、来る90億人の時代に対応しなくてはならない。そこで、本特論では、人口問題、食糧問題、エネルギー問題に絡むバイオエタノール生産について学ぶことで食と環境を科学する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：人口問題</p> <p>第2回：食糧需給問題</p> <p>第3回：エネルギー（水力）</p> <p>第4回：エネルギー（火力）</p> <p>第5回：エネルギー（原子力）</p> <p>第6回：経済動向からみた食糧</p> <p>第7回：日本の食糧自給率</p> <p>第8回：露地栽培と施設栽培</p> <p>第9回：野菜工場</p> <p>第10回：LED光と白色光</p> <p>第11回：機能付加栽培</p> <p>第12回：組み換え食品</p> <p>第13回：組み換え動物</p> <p>第14回：食糧生産に関わる耕地問題</p> <p>第15回：総括</p>			
<p>準備学習：</p> <p>大学基礎生物、生化学の理解が必要である。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>関連文献、資料等の配布により授業構成する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>出席状況、討論参加状況、リサーチなど総合判断する。</p>			

授業科目名：住生活環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：川上裕司
<p>授業の到達目標及びテーマ：一般住宅および美術館、図書館などの身近な公共施設を含めた「生活に関わる室内環境」を対象として家政学、環境衛生学、住居医学を踏まえた「室内環境学」の基礎から現状と対策までをテーマとする。人間生活学専攻の博士課程大学院生として、「快適な住生活環境とは何か？」について「博士論文」のテーマを踏まえた議論ができるようになること、また、研究課題の適切な研究手法を立案できることを到達目標とする。</p>			
<p>授業の概要 家政学と関連が深い住環境の現状（問題点）と快適な住環境や住まい方（対策）をバックグラウンドとして、特に環境衛生学を中心テーマとした講義と討論を毎回行う。博士課程の大学院生向けの講義であるので、博士となるために必要な理系的思考を養うために適切な最新論文の輪読も授業に盛り込む。また、途中で小課題を与えて、博士論文制作のための助言を行う。</p>			
<p>授業計画：</p> <p>第1回： 家政学からみた住生活環境＜概論＞</p> <p>第2回： 化学物質と住生活環境＜揮発性有機化合物，VOC，シックハウス症候群＞</p> <p>第3回： 物理的要素と住生活環境＜音，光，温熱，臭い＞</p> <p>第4回： 環境衛生学と住生活環境（1）＜環境微生物・環境衛生学の室内環境との関わり＞</p> <p>第5回： 環境衛生学と住生活環境（2）＜真菌（カビ）とアレルギー疾患＞</p> <p>第6回： 環境衛生学と住生活環境（3）＜細菌とウイルスによる感染症＞</p> <p>第7回： 有害動物と住生活環境＜ダニと昆虫によるアレルギー・感染症＞</p> <p>第8回： 愛玩動物と住生活環境＜愛玩動物飼育のメリットとデメリット＞</p> <p>第9回： ユニバーサルデザインと住生活環境</p> <p>第10回： 小課題（論文を読んだレポート制作）</p> <p>第11回： 関連論文 輪読（1）～都市環境と住生活環境を考える～</p> <p>第12回： 関連論文 輪読（2）～地球環境と住生活環境を考える～</p> <p>第13回： 関連論文 輪読（3）～環境教育と住生活環境を考える～</p> <p>第14回： 総合討論～生活者にとって快適な住環境とは何かを考える（1）～</p> <p>第15回： 総合討論～生活者にとって快適な住環境とは何かを考える～</p>			
<p>準備学習：次回の講義までにテキスト「室内環境学概論」および「室内環境における微生物対策」の講義に関係するページを熟読し、要点および質問事項をノートにまとめておくこと。</p>			
<p>テキスト ①室内環境学概論，室内環境学会編（編集委員長・川上裕司），東京電機大学出版局（2010年刊），②室内環境における微生物対策，室内環境学会微生物分科会編（編集委員長・阿部恵子），技報堂出版（2016年刊）</p>			
<p>参考書・参考資料等： 住居医学（V），筏義人・吉田修 編著，米田出版（2011年刊）</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点30%，小課題20%，レポート50%。小課題に対するフィードバックを行う。</p>			

授業科目名：生物環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：森田 幸雄
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>各自の専門分野の環境微生物学に関連する研究について、博士として一人で企画できる考え方や研究を遂行できる手法・知識を習得する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>バイオハザードとバイオセーフティーについての考え方を基礎としながら、生物（細菌・ウイルスも含む）の生態、有用性、健康危害について理解を深める。その後、関連法令（「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）」、「食品衛生法」等）に記載されている病原体のリスクおよび環境（室内環境も含む）や食品に起因する病原体（感染症、動物由来感染症、室内環境からの病原体）について微生物学的な特徴や本病原体による食中毒や感染症発生時の疫学的解析方法について習得する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：授業内容説明、環境微生物とは</p> <p>第2回：環境に存在する生物</p> <p>第3回：自然環境・大気と生物（微生物も含む）との関連</p> <p>第4回：自然環境・水環境と生物（微生物も含む）との関連</p> <p>第5回：室内環境と生物（微生物も含む）との関連</p> <p>第6回：食べものと生物（微生物も含む）との関連</p> <p>第7回：微生物の検出や同定方法</p> <p>第8回：微生物の検出や同定等のための遺伝子学的技術について</p> <p>第9回：微生物の同定や解析等のための遺伝子学的分析法について</p> <p>第10回：自然環境・水環境に存在する病原微生物（主に環境に存在する病原細菌・ウイルス）</p> <p>第11回：環境に存在する病原微生物（主に動物由来感染症起因病原体）</p> <p>第12回：環境に存在する病原微生物（主に人固有の感染症起因病原体）</p> <p>第13回：バイオハザードの概念</p> <p>第14回：生物環境学まとめ</p> <p>第15回：まとめ・試験</p>			
<p>準備学習：</p> <p>次回に実施する内容に関する文献等(英文を含む)を手渡すので、全文を読み理解しておくこと</p>			
<p>テキスト：</p> <p>関連論文、総説等を利用</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>室内環境学概論(東京電機大学出版社)、関連論文、総説等を利用</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点（40%），毎回実施レポート(30%)，試験（30%）により評価。60%以上を合格とする。</p>			

授業科目名：児童文化環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：是澤優子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本特論は、〈近代日本における「子どものための文化」の萌芽と展開〉をテーマに据え、以下の3点を到達目標とする。</p> <p>①近代的児童観が成立する過程を理解し、それに基づいて明治期における「子どものための文化」誕生の背景と経緯を説明できる。</p> <p>②児童研究との関連において児童文化研究はどのように行われ、どのような成果を上げていたかを理解し、その概要を説明できる。</p> <p>③各自が担当する文献や論文購読において、適切な報告書準備、分かりやすい発表ができる。あわせて、討論において積極的かつ建設的な参加ができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童文化は、子どもの成長発達に深く関わる文化であり、「子どもがつくりだす文化」と「大人が子どものためにつくりだす文化」という視座を合わせ持つ概念である。</p> <p>本特論では、日本近代における児童文化史の分析を通して、人間生活学専攻の学位授与方針に基づく総合的・学際的視野に立つ人材育成に、児童文化環境学の側面から貢献する。具体的には、明治後期から昭和初期にかけて展開した児童用品研究、児童博覧会といった社会的活動を基軸に据える。明治期に出版された雑誌や文献、関係資料を読み込みながら、子どものための文化環境を大人が意識してつくりだす営みが産学協同の形をとりながら社会的規模で始まった背景と要因、展開歴史的意義を考察する。授業は、講義形式と報告、討議を組み合わせる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： 授業ガイダンスー講義の目的と授業方針の解説</p> <p>第2回： 受講生の問題意識説明</p> <p>第3回： 文献紹介と割当</p> <p>第4回： 雑誌『児童研究』の講読（1）児童学の視点</p> <p>第5回： 雑誌『児童研究』に関する報告と検討（1）児童学の視点から</p> <p>第6回： 雑誌『児童研究』の講読（2）児童文化の視点</p> <p>第7回： 雑誌『児童研究』に関する報告と検討（2）児童文化の視点から</p> <p>第8回： 討論：近代日本における児童研究の意義</p> <p>第9回： 日本における児童博覧会（1）明治・大正期の児童博覧会</p> <p>第10回： 日本における児童博覧会（2）子どもへの注目とこども博覧会</p> <p>第11回： 日本における児童博覧会（3）近代的百貨店と児童博覧会</p> <p>第12回： 子ども用品研究のはじまりと展開</p> <p>第13回： 子ども用品の改良と創造に尽力した先達たち</p> <p>第14回： 総合討論：近代日本における「子どものための文化」創出の諸要因</p> <p>第15回： 講義のまとめー子ども像の変容と文化環境の創出</p>			

準備学習：

授業前は、テーマに関連する文献・論文などを読み、要点と自分の意見をまとめておく。(予習1時間)

授業後は、授業内容をふりかえり、論点を整理したレポートを提出する。(復習1時間)

テキスト：

授業開講後に指示する。また、適宜プリントを配布する。

参考書・参考資料等：

神野由紀『子どもをめぐるデザインと近代』(世界思想社、2011)、本田和子『子ども100年のエポック』(フレーベル館、2000)、山口昌男『敗者の精神史』(岩波書店、1995)。その他は、進捗状況を見ながら適宜紹介する。

学生に対する評価：

①平常点60% (報告書20%、発表20%、授業内容・発表に対するコメントや討論への参加20%)、②期末レポート40%により、総合的に判断し成績を評価する。また、報告書、レポートに対して、到達目標に照らし合わせながら、フィードバックを行う。

授業科目名：児童文化環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：佐藤宗子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>児童を取り巻く文化環境の中における「児童文学」ジャンルについて、歴史的な成立の過程や現在の状況などを評価することができる。具体的な作品に接して、その表現内容を感じ取ることができる。自身の問題意識に基づいて、意見交換に参加することができる。</p> <p>テーマ＝児童文学とは何か——成立・展開および現状を考える——</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童を取り巻く環境の一要因としての「文学」を考察する。「児童文学」という分野の成立と展開を、近代の歴史的状況から出発し、現代の多様化に至るまでを、「子ども」観の問題などからめつつ、概観する。また、具体的に、批評的文章にふれるとともに、短編や長編の作品に接することで、現在におけるこの分野の可能性や課題を追究する。これにより、学位授与方針で示されるような、広く社会・文化状況の中における「文学」の領域についての学識と理解を有し、総合的・学際的視野に立つ人材養成をはかるものとする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>授業開始時に受講者の希望を聞き、それらのある程度活かしたかたちで授業を進めることにしたい。</p> <p>第1回：はじめに——「児童文学」とは何かを考えるために——</p> <p>第2回：「児童文学」の歴史（1）——海外における誕生——</p> <p>第3回：「児童文学」の歴史（2）——海外における展開——</p> <p>第4回：「児童文学」の歴史（3）——日本の場合——</p> <p>第5回：近代的「子ども」観と「童話」伝統批判</p> <p>第6回：「現代児童文学」の出発——『子どもと文学』を読む——</p> <p>第7回：小川未明作品の再検討</p> <p>第8回：千葉省三作品の再検討</p> <p>第9回：「現代児童文学」の展開</p> <p>第10回：「現代児童文学」の転換</p> <p>第11回：現代の短編を読む（1）——日常的な作品——</p> <p>第12回：現代の短編を読む（2）——非日常的な作品——</p> <p>第13回：現代の長編を読む（3）——日常的な作品——</p> <p>第14回：現代の長編を読む（4）——非日常的な作品——</p> <p>第15回：児童文学の展望</p>			
<p>準備学習：</p> <p>指定したテキストについては、集中講義の授業開始前にざっと目を通してきてもらえることを望む。およそ2～3時間を見込む。また、期間中の配付資料については、読み直してもらえるようお願い。およそ、1日当たり40分程度。</p>			
<p>テキスト：</p>			

プリントを配布する。

また二冊程度、授業開始時に入手可能な作品を、確認し、集中講義の少し前に指定する予定。

参考書・参考資料等： 授業時に、受講者の状況に応じて随時、指示する。

学生に対する評価：

授業への出席及び発言等の参加状況を70パーセント、ミニレポートを30パーセントとして合算し、評価をする。なお、とりあげた児童文学の作品・批評について評価することができたか、その表現内容を感じとることができたか、自身の問題意識に基づいて意見交換できたかを評価の観点とする。またミニレポートについては、希望により後日コメントを返すこととする。

。

授業科目名：児童環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：大澤力
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本専攻における専門的知識習得のためのコースワーク授業及び研究の一環として児童期全般における自然環境・社会環境との関係性を理論と実践から学び、地域社会・日本・世界へと視野を展開し、児童期における環境学の重要性および可能性を把握し、さらに新たな課題を探求できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童を対象とした環境教育の重要性と可能性を理論的理解および実践的理解を融合した形で学び、実践事例や体験的演習を経て、身近な環境から地球規模までの時代的課題の克服法を検討しつつ、その具体的な手立てを考察し、各自における今後の研究と学習に資する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：はじめに 児童環境学とは？ 講義オリエンテーション</p> <p>第2回：未来を創造する自然の中での子育て</p> <p>第3回：科学性の芽生えを促進する児童期自然教育（1）児童期自然教育の源流</p> <p>第4回：科学性の芽生えを促進する児童期自然教育（2）科学性の芽生えとビオトープ</p> <p>第5回：全人格を育む児童期環境教育（1）環境教育における里庭の可能性</p> <p>第6回：全人格を育む児童期環境教育（2）身近な環境を活用する望ましい教育事例</p> <p>第7回：子どもの自然教育・環境教育から持続可能な開発のための教育へ</p> <p>第8回：子どもたちの地球における現状と課題</p> <p>第9回：いのちの教育を始めることの重要性</p> <p>第10回：世界の環境教育先進国の事例に学ぶ</p> <p>第11回：子どもが輝く自然環境・社会環境を活かした保育と教育</p> <p>第12回：園庭・校庭から始める身近な環境と出会う保育と教育</p> <p>第13回：心を育てる環境教育のための指導計画</p> <p>第14回：21世紀に生きるあなたへ 地球と育ち合う環境教育</p> <p>第15回：まとめ 児童環境学の未来</p>			
<p>準備学習：予習1時間、復習毎授業後には、レポートを提出のこと。</p>			
<p>テキスト：・「幼児の環境教育論」 大澤 力 著・文化書房博文社</p> <p>・「科学性の芽生えから問題解決能力育成へ—新学習指導要領における資質・能力の視点から—」 小林 辰至・大澤 力 編著・文化書房博文社</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「全人教育論」小原国芳著・玉川大学出版部 ・「幼児からの環境教育論」山内昭道著・明治図書 ・「ふるさとを感じる あそび事典」山田卓三編 原体験教材グループ著・農文協 			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業への出席及び発言等の参加状況を70パーセント、ミニレポートを30パーセントとして合算し、評価を実施する。</p>			

授業科目名：衣生活材料学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：濱田仁美
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>高分子化学及び熱力学の基礎を修得し、衣服材料の特性をより物理化学的視点から考察して、課題を探究できる能力を養う。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>衣服材料の大半は繊維製品からなり、原材料の繊維の性質は最終製品である衣服材料の性能に密接に関連している。繊維は高分子であり、高分子の構造や性質、合成法、反応機構を理解することは、繊維特性のより深い理解につながり、自身の研究の考察を行う上でも重要な知識となる。</p> <p>これらの学習を通して、衣服材料の特性についてより包括的な考察を行い、課題を探究できるようになることは、学位を取得する上で重要である。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：高分子材料の特徴【天然高分子と合成高分子】</p> <p>第2回：高分子の構造【一次構造、高次構造】</p> <p>第3回：高分子の熱的性質【エンタルピー、エントロピー】</p> <p>第4回：高分子の力学的性質【粘弾性】</p> <p>第5回：天然高分子Ⅰ【セルロース】</p> <p>第6回：天然高分子Ⅱ【アミノ酸とタンパク質】</p> <p>第7回：合成高分子Ⅰ【重合プロセス】</p> <p>第8回：合成高分子Ⅱ【反応機構】</p> <p>第9回：紡糸【湿式・乾式紡糸、熔融紡糸、液晶紡糸】</p> <p>第10回：機能性高分子【改質法と特性】</p> <p>第11回：セルロースナノファイバー【調製法と特性】</p> <p>第12回：繊維製品の物理量測定法Ⅰ【機械的性質】</p> <p>第13回：繊維製品の物理量測定法Ⅱ【機能的特性】</p> <p>第14回：繊維製品の物理量測定法Ⅱ【視覚に関する物理量】</p> <p>第15回：まとめと解説</p>			
<p>準備学習：予習1時間、復習1時間</p> <p>授業前にテキストの次回範囲を読み、要点をまとめておくこと。</p> <p>「有機化学」「繊維学」「被服材料学」の復習。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>「高分子材料の化学」（丸善）、「最新テキスタイル工学」（繊維社）</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>必要に応じて、その都度指示する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>予習復習を含めた授業時の回答等の平常点30点。課題に対するレポート提出30点。試験40点。</p>			

授業科目名：衣生活材料学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：飯塚堯介
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>被服材料の特性をそれを構成する繊維のレベルで理解することで、新たな特性の付与、特性の改善に向けた方策を、自ら考えることが可能となる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>繊維とその集合体の特性、単繊維の構造と物性、被服材料としての機能とその発現機構、今後期待される新たな機能などについて、最近世界的に注目されているセルロースナノファイバーの可能性を含めて学習する。これらの学習を通して衣服材料の特性についての包括的理解を深めることは、人間生活学の学位を習得するうえで重要である。</p>			
<p>授業計画 キーワード：繊維、繊維集合体、被服材料、セルロースナノファイバー、機能、保温性、吸湿性、吸水性、透水性</p> <p>第1回：天然繊維とその繊維集合体の特性：綿、麻およびその他の植物繊維</p> <p>第2回：天然繊維とその繊維集合体の特性：絹、羊毛およびその他の動物繊維</p> <p>第3回：再生繊維および半合成繊維とその集合体</p> <p>第4回：セルロースナノファイバーとは</p> <p>第5回：セルロースナノファイバーの調製法とその特質</p> <p>第6回：セルロースナノファイバーの問題点</p> <p>第7回：合成繊維とその繊維集合体の特性</p> <p>第8回：被服材料としての機能とその発現：保温性</p> <p>第9回：被服材料としての機能とその発現：吸湿性、吸水性</p> <p>第10回：被服材料としての機能とその発現：摩擦</p> <p>第11回：被服材料としての機能とその発現：圧縮、引っ張り</p> <p>第12回：被服材料に期待される新たな機能：快適性</p> <p>第13回：被服材料に期待される新たな機能：回収・再利用</p> <p>第14回：被服材料に今後期待される新たな機能</p> <p>第15回：これからの繊維産業</p>			
<p>準備学習：</p> <p>事前にデータベースを用いて関連文献を調査し、最新の学術情報の概略を理解しておくこと。必要時間：1時間程度。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>特になし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>特になし</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>予習復習を含めた授業時の応答30点、課題に対するレポート提出30点、口答試問40点。</p>			

授業科目名：食品材料利用学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：峯木真知子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生活科学の分野として、これからの食料問題を踏まえ、特定の食材を研究テーマに選び、その調理加工特性を知る。将来的にどのような効率の良い食品素材になりうるのか、どのように加工されるのかを分類する。食品素材について、過去の文献を検索し、開発および応用研究の実験計画を立てる。専門的領域における知識を深め、高度専門職業人としてこれらを応用して自立した活動や研究ができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>興味のある食品素材について、調理特性を予備実験より調べ、その栄養効率、加工特性を考えていく過程を学修する。また、それらの食品素材をどのように研究していくのかのテクニックも検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：食品材料のおいしさ (1) 物理的特性</p> <p>第3回：食品材料のおいしさ (2) 化学的特性</p> <p>第4回：食品の官能評価とその方法(1) 視覚、嗅覚</p> <p>第5回：食品の官能評価とその方法(2) 味覚</p> <p>第6回：食品の構造観察とその方法 (1) 光学顕微鏡のテクニックと応用</p> <p>第7回：食品の構造観察とその方法 (2) 走査型電子顕微鏡のテクニックと応用</p> <p>第8回：食品のテクスチャーとその方法 (1) 咀嚼・嚥下機能低下食品</p> <p>第9回：食品のテクスチャーとその方法(2)</p> <p>第10回：食品の問題点と開発</p> <p>第11回：現在社会における食生活の問題点と文化的背景</p> <p>第12回：各自の研究に関連した論文内容の輪読、発表、質疑応答 (和文)</p> <p>第13回：各自の研究に関連した論文内容の輪読、発表、質疑応答 (英文)</p> <p>第14回：各自の研究に関連した論文内容の輪読、発表、質疑応答 (英文)</p> <p>第15回：総括、レポート提出</p>			
<p>準備学習：</p> <p>文献を素早く読み、理解できるように、常に文献検索を怠らず、論文を読んでいる事</p>			
<p>テキスト：</p> <p>テーマに沿った論文および著書の紹介、食品・調理・加工の組織学 学窓社</p> <p style="text-align: center;">食卵の科学とその機能 アイケイコーポレーション</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>随時紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：出席 (30%)、自主的な学習態度 (20%)、課題およびレポート提出 (50%) などで総合的に評価する。</p>			

授業科目名：食品材料利用学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：小林理恵、長尾慶子 オムニバス
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>受講者自らが特定の食品を選定し、調理科学分野における研究動向および利用状況を調べて問題抽出をした上で、この問題解決をする意義と重要性を説明できることを目標とし、ここから妥当な研究手法がデザインできるよう基盤を固める。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>食物の嗜好性を高め健康増進に寄与するだけでなく、社会貢献へと結び付けられるように食品材料を有効利用するためには、自然科学的アプローチに加えて、人文科学および社会科学的な理解が必要である。学位授与方針に基づき、学際的なアプローチとして、本講座では社会および経済的背景、歴史的背景、国内外における利用の現状など、さまざまな観点から研究動向と利用状況を調べてテーマ食品に関わる課題を抽出した上で、さらなる有効利用法を見出す意義と重要性を考える機会としたい。授業はディスカッションを含む演習形式とし、小林（機能性・調理手法、事例研究）と長尾（食材と伝熱・物性）の専門分野を中心に、各テーマごとに適宜指導と相談にあたる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：テーマ食品に関連する文献収集（国会図書館の利用法を含む）および臨地調査</p> <p>第2回：基礎的な情報の収集（テーマ食品の食品学的位置づけ）</p> <p>第3回：国内外における歴史的背景（食としての利用の起源および国内への伝播など）</p> <p>第4回：近年における生産と流通の実態</p> <p>第5回：国内における調理・加工利用の現状と食習慣</p> <p>第6回：国外における調理・加工利用の現状と食習慣</p> <p>第7回：一次特性に関する過去の研究と解明されている事項の確認</p> <p>第8回：二次特性に関する過去の研究と解明されている事項の確認</p> <p>第9回：三次特性に関する過去の研究と解明されている事項の確認</p> <p>第10回：利用向上に向けて有意義と考えられる解決すべき問題点の抽出</p> <p>第11回：問題解決のための研究方法と期待される結果（仮説の設定）</p> <p>第12回：上記についてのまとめ（プレゼンテーション作成）</p> <p>第13回：プレゼンテーションおよび討議の実施</p> <p>第14回：討議結果を踏まえた課題解決法の整理</p> <p>第15回：最終プレゼンテーションおよび討議によりテーマ食品の有効利用研究の展望をまとめる</p>			
<p>準備学習：関連論文の収集、調査（1～2時間）プレゼンテーションの練習（1～2時間）ディスカッションの整理（1時間）</p>			
<p>テキスト：特に指定しない。</p>			
<p>参考書・参考資料等：評価の高い学術雑誌および成書を紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>自主的な学習態度と授業への取組（30%）毎回の授業におけるディスカッションおよび最終プレゼンテーションと質疑応答の内容（70%）により総合的に評価する。</p>			

授業科目名：機能的食品素材開発学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：佐藤吉朗
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>飽食の時代にあつて、食品に対する日本人の欲求はおいしさに留まらず食品の機能特にその食品を食することによって我々がどのような健康に対する恩恵を受けるかという点に興味を持たれている。実際に機能的食品を開発するに当たって、どのような点に力点を置くべきなのか、この授業を通して考える能力を養う。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>講義、文献調査及び討論という形で機能的食品について開発の道筋を習得してゆく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：機能的食品とは概説</p> <p>第2回：機能的食品の種類について</p> <p>第3回：特定保健用食品の種類</p> <p>第4回：特定保健用食品の開発状況</p> <p>第5回：特定保健用食品と所謂健康食品との違い</p> <p>第6回：市場調査（若者用）</p> <p>第7回：市場調査（中年者向け）</p> <p>第8回：市場調査（高齢者向け）</p> <p>第9回：市場調査（介護者向け）</p> <p>第10回：討論（若者向け食品について）</p> <p>第11回：討論（中年者向け食品について）</p> <p>第12回：討論（高齢者向け食品について）</p> <p>第13回：討論（介護者向け食品について）</p> <p>第14回：討論（健康食品の意義）</p> <p>第15回：総括</p>			
<p>準備学習（予習・復習等）</p> <p>次回の授業内容に対する調査</p>			
<p>テキスト</p> <p>プリント等、随時</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>随時</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>授業に対する取り組み姿勢：平常点40点、レポート作成40点、諮問に対する受け答え20点。</p>			

授業科目名：分子生物学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：大西淳之
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>細胞表面に届いたシグナル（ホルモン、増殖因子、栄養因子など）がどのような機序で細胞膜で隔てられた内部に情報として伝達され、処理されるのかについて最新の知見も含めて理解を深める。前半は関連教科書の輪読を行い基礎的な理解につとめ、後半は関連する英語論文をセミナー形式で発表しながら最新の知見について学習する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>心身の健康と食との関連について、代謝生化学や栄養シグナル伝達の視点から解説する。この特論では細胞間や細胞内での情報伝達の基本原理と、外界からの刺激による細胞の応答に関する分子機構を理解する。特に、細胞質と核内との間で行われる物質輸送の調節機序については、栄養素の関わりに着目して最新の知見をもとに解説する。加えて、核内イベントのうち栄養条件に応じたクロマチンの構造変化と、それに伴う遺伝子発現制御についても解説する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： シグナル伝達の概要1：チロシンキナーゼ、MAPキナーゼ、GTP結合タンパク質</p> <p>第2回： シグナル伝達の概要2：イノシトールリン脂質、転写制御</p> <p>第3回： チロシンキナーゼ1：受容体型チロシンキナーゼによるシグナル伝達経路</p> <p>第4回： チロシンキナーゼ2：非受容体型チロシンキナーゼによるシグナル伝達経路</p> <p>第5回： MAPキナーゼ1：MAPキナーゼファミリー分子の制御機序</p> <p>第6回： MAPキナーゼ2：MAPキナーゼファミリー分子の機能</p> <p>第7回： GTP結合タンパク質1：3量体Gタンパク質を介したシグナル伝達機序</p> <p>第8回： GTP結合タンパク質2：Small Gタンパク質を介したシグナル伝達機序</p> <p>第9回： 情報物質としてのイノシトールリン脂質の構造と代謝</p> <p>第10回： 転写装置とプロモーター</p> <p>第11回： 転写制御</p> <p>第12回： イオンチャンネルの制御、受容体型イオンチャンネルの制御</p> <p>第13回： ユビキチン・プロテアソーム依存的タンパク質分解システム</p> <p>第14回： 栄養シグナル伝達に関する最新知見</p> <p>第15回： 精神疾患と代謝生化学に関する最新知見</p>			
<p>準備学習：</p> <p>1週間前に配布する解説プリントを熟読すること。講義後にレポートを作成し、次週提出すること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>遺伝子発現のオンとオフ（メディカル・サイエンス・インターナショナル）</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>シグナル伝達がわかる（羊土社）、</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点30点、理解力（読解力も含む）40点、プレゼンテーション力30点</p>			

授業科目名：分子生物学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：木元 幸一
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>内外の学術雑誌を読み理解できるようにする</p> <p>学術雑誌からテーマに関する論文を選び出す力を付ける</p> <p>課題の探究に向けての研究方法を組み立てることができるようにする</p> <p>最新の研究動向を把握できる力をつける。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>血圧を中心とする生活習慣病に関する内外の最新の研究動向を紹介する。その中でどこに今日的な研究課題があり、それぞれがどのような研究方法を取り入れて課題解決を図っているかを検証し、そのことについて討論を行うことにより、一層の理解を深める。</p> <p>また、将来の高血圧を中心とした生活習慣病研究に対する展望を考察し、我々が果たすべき研究課題について講義と討論を行う。</p>			
<p>授業計画 キーワード；レニン・アンギオテンシン・アルドステロン系、高血圧</p> <p>第1回：分子生物学とは</p> <p>第2回：高血圧の成因の概略</p> <p>第3回：高血圧の成因 液性因子</p> <p>第4回：レニン・アンギオテンシン系</p> <p>第5回：レニンについて</p> <p>第6回：アンギオテンシノーゲンについて</p> <p>第7回：アンギオテンシンⅠ、アンギオテンシンⅡについて</p> <p>第8回：アンギオテンシンⅡ受容体について</p> <p>第9回：アンギオテンシン変換酵素ACEについて</p> <p>第10回：レニン・アンギオテンシン・アルドステロン系総合討論</p> <p>第11回：ANPについて</p> <p>第12回：エンドセリンその他血管因子について</p> <p>第13回：動脈硬化について</p> <p>第14回：肥満について</p> <p>第15回：生活習慣病と高血圧に関する総合討論</p>			
<p>準備学習：</p> <p>特になし</p>			
<p>テキスト：</p> <p>Hypertensinn I ,IIの中から</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>ハーパーの生化学 ヴォートの生化学</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>課題探究発表と討論及び最終レポート</p>			

授業科目名：被服管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：森 俊夫
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>各種繊維製品の多様化により、個々の製品に対する取り扱いも複雑化・高度化している。化学物質などによる環境汚染や事故事例を紹介し、問題点を洗い出し、正しい取扱い方法を理解することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>近年、多くの機能性繊維、エコフレンドリー繊維が開発され、素材の多様化、複合化が進んでいる。これら繊維製品の購入時の状態を長く保持するには、素材の特性を知り、正しい取扱いを行う必要がある。そこで、取り扱い中に事故につながりやすい洗濯、ドライクリーニングを中心に、事故事例を紹介し、化学物質を含む繊維製品の正しい取扱い方法を理解する。日本のみならず、海外ではどのような取り扱いをしているか、また、クリーニングに関する最近の文献も紹介する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：化学物質の危険性と環境汚染</p> <p>第2回：クリーニングについて</p> <p>第3回：取り扱い絵表示について</p> <p>第4回：ドライクリーニング溶剤の動向</p> <p>第5回：ヨーロッパでのクリーニングの動向</p> <p>第6回：アメリカでのクリーニングの動向</p> <p>第7回：機能性素材等のドライクリーニングにおける問題点</p> <p>第8回：染色製品のドライクリーニングにおける問題点</p> <p>第9回：機能性繊維の取り扱い方における問題点</p> <p>第10回：機能性繊維の正しい取り扱い方</p> <p>第11回：エコフレンドリー繊維製品の取り扱い方における問題点</p> <p>第12回：エコフレンドリー繊維製品の正しい取り扱い方</p> <p>第13回：洗濯に関する最近の文献の講読</p> <p>第14回：洗濯に関する最近の文献の講読</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：予習1時間、復習・ノート整理1時間</p>			
<p>テキスト：プリントを配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：必要に応じて授業内で紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：予習・復習の有無20点。諮問に対する受け答え、出席などの平常点40点。課題に対するレポート提出40点。</p>			

授業科目名： 被服管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：小林泰子
授業の到達目標及びテーマ 各種繊維製品の多様化により、個々の製品に対する取り扱いも複雑化している。事故事例を紹介し、問題点を洗い出し、正しい取扱い方法を理解することを目標とする。			
授業の概要 近年、多くの機能性繊維、エコフレンドリー繊維が開発され、素材の多様化、複合化が進んでいる。これら繊維製品の購入時の状態を長く保持するには、素材の特性を知り、正しい取扱いを行う必要がある。そこで、取り扱い中に事故につながりやすい洗濯、ドライクリーニングを中心に、事故事例を紹介し、繊維製品の正しい取扱い方法を理解する。日本のみならず、海外ではどのような取扱いをしているか、また、クリーニングに関する最近の文献も紹介する。			
授業計画 第1回：はじめに 第2回：クリーニングについて 第3回：取り扱い絵表示について 第4回：ドライクリーニング溶剤の動向 第5回：ヨーロッパでのクリーニングの動向 第6回：アメリカでのクリーニングの動向 第7回：機能性素材等のドライクリーニングにおける問題点 第8回：染色製品のドライクリーニングにおける問題点 第9回：機能性繊維の取り扱い方における問題点 第10回：機能性繊維の正しい取り扱い方 第11回：エコフレンドリー繊維製品の取り扱い方における問題点 第12回：エコフレンドリー繊維製品の正しい取り扱い方 第13回：洗濯に関する最近の文献の講読 第14回：洗濯に関する最近の文献の講読 第15回：まとめ			
準備学習：予習1時間、復習・ノート整理1時間			
テキスト：プリントを配布する。			
参考書・参考資料等：必要に応じて授業内で紹介する。			
学生に対する評価：予習・復習の有無20点。諮問に対する受け答え、出席などの平常点40点。課題に対するレポート提出40点。			

授業科目名： 臨床栄養管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：澤田めぐみ
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>わが国のCOPDは欧米に比べ栄養障害の頻度が高く、体重減少は気流閉塞とは独立した予後因子であるとされている。こうしたことから臨床的に重要な意義を持つと考えられるCOPDの栄養管理について、病期別の特徴をとらえて理解する。特に酸素療法・補助換気療法を受ける中等症以上の症例を中心に理解を深め、栄養管理の更なる発展に必要な課題を見出し解決していくことのできる能力を養う。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>COPDの栄養療法に関する諸研究についての考察を通じ、人間生活学専攻の学位授与方針に基づき、COPDの予後改善に寄与する栄養管理について新しい課題を発見し、それを自らの研究成果によって証明することのできる能力を養う。またCOPDの呼吸リハビリテーションにおいては栄養士・医師・看護師・理学療法士などによるチーム医療が不可欠なことから、栄養学のみにとどまらない学際的視野を持って研究成果をまとめる能力を育む。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：酸素療法の実際 第2回：在宅酸素療法の実際 第3回：補助換気領邦の実際 第4回：在宅人工呼吸療法の実際 第5回：COPD重症例の栄養療法 第6回：COPD重症例の栄養評価 第7回：急性増悪の対応 第8回：喘息合併COPDの管理 第9回：全身併存症と肺合併症の対応 第10回：COPDの薬物管理 第11回：COPDの運動療法 第12回：在宅管理の実際 第13回：終末期COPDへの対応 第14回：全人的対応のあり方 第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：毎回次回の予習内容を指示する（予習時間1時間）。講義終了後は復習を1時間程度行う事。</p>			
<p>テキスト： 参考とする論文をその都度指示する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： COPD（慢性閉塞性肺疾患）診断と治療のためのガイドライン第4版　メディカルレビュー社</p>			
<p>学生に対する評価： 平常点50%（口頭試問・小テストなどを含む）・課題に対するレポート提出50%</p>			

授業科目名：臨床栄養管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：市丸雄平
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>2020年から2025年にかけて、団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となり、支援・介護を必要とする人口が急増する。一方、核家族化・一人暮らし・家族の高齢化にともない、自宅あるいは独居状態で介護を行うことが困難になっている。ここにおいて、家政大学を担う学生も、“老病”についての概念を研究の一隅にとり入れる必要がある。ここでは、“健やかな老いを育む基礎知識”をテーマとして、高齢者の心身の病態生理を理解する能力を養生する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本講座では、高齢化に伴う臓器機能の変化を、身体機能と精神機能に分け、各臓器の機能低下を防ぐための生活習慣のあり方と評価法を栄養・運動・睡眠の立場より解説する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：高齢者を取り巻く社会構造</p> <p>第2回：高齢者に見られる症候Ⅰ（精神・神経症候：認知機能、抑うつ、譫妄、妄想）</p> <p>第3回：高齢者に見られる症候Ⅱ（身体症候：低栄養、サルコペニア、誤嚥、便秘、尿路症状）</p> <p>第4回：神経疾患Ⅰ（アルツハイマー病、脳変性疾患）：脳と栄養</p> <p>第5回：神経疾患Ⅱ：脳血管障害、脳梗塞、硬膜下出血：梗塞と出血</p> <p>第6回：運動器疾患（骨粗鬆症、変形性関節症）：骨を鍛える</p> <p>第7回：呼吸器疾患（慢性閉塞性呼吸器疾患、誤嚥性肺炎、インフルエンザ）、呼吸器を鍛える</p> <p>第8回：循環器疾患（高血圧、心不全、不整脈）：自律神経と心拍変動</p> <p>第9回：消化器疾患（誤嚥、GERD、胃潰瘍、消化機能、虚血性大腸炎）：便秘の予防、ノロウイルス</p> <p>第10回：腎・泌尿器疾患（慢性腎臓病、腎不全、前立腺肥大）：尿失禁、骨盤底筋運動</p> <p>第11回：代謝疾患Ⅰ（糖尿病、痛風）：プリン体</p> <p>第12回：代謝疾患Ⅱ（脂質異常症、動脈硬化）：オメガ3</p> <p>第13回：血液疾患（貧血、凝固異常）：抗凝固療法</p> <p>第14回：免疫疾患、水と電解質、皮膚疾患、耳鼻科疾患、眼科疾患</p> <p>第15回：高齢者機能評価（R4）薬物療法、リハビリテーション</p>			
<p>準備学習：ホームページで解説する。</p>			
<p>テキスト：独自に、各項目の内容をホームページ化して、配布する。</p>			
<p>参考書：老年看護過程「医学書院」</p>			
<p>学生に対する評価：授業の項目毎に、課題提出を行いその結果により評価する。</p>			

授業科目名：健康管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：岡純
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生活習慣病の一次予防には、栄養や運動などの生活習慣の是正による肥満の防止が大切であるが、授業では、肥満と肥満症、肥満の健康に及ぼす影響、糖尿病、脂質異常症、高血圧、動脈硬化症などの予防と治療について学習し、知識を習得することを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>現在の日本の直面する健康問題の一つに、肥満・糖尿病、脂質異常症、高血圧など非感染性慢性疾患の蔓延とそれらによるQOLの低下がある。これら生活習慣病は、栄養や運動などの生活習慣の是正が大切な一次予防と考えられ、多くの研究が行われている。</p> <p>この授業では、栄養や運動などの生活習慣の是正に関する知識の学習を目的とし、英語文献などを検索してそれらを紹介しながら内容を精読し、詳しく考察する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：肥満・糖尿病について（1）肥満の判定、肥満の疫学</p> <p>第2回：肥満・糖尿病について（2）肥満症という疾患概念</p> <p>第3回：肥満・糖尿病について（3）糖尿病の病因と病態生理および治療、予後</p> <p>第4回：脂質異常症について（1）脂質異常症の概念と病態生理</p> <p>第5回：脂質異常症について（2）脂質異常症の臨床所見、検査所見</p> <p>第6回：脂質異常症について（3）脂質異常症の診断、治療、予後</p> <p>第7回：高血圧（1）本態性高血圧の定義</p> <p>第8回：高血圧（2）高血圧の病態生理と臨床所見、診断</p> <p>第9回：高血圧（3）高血圧の治療、予後</p> <p>第10回：動脈硬化症（1）肥満と動脈硬化症</p> <p>第11回：動脈硬化症（2）糖尿病と動脈硬化症</p> <p>第12回：動脈硬化症（3）脂質異常症と動脈硬化症</p> <p>第13回：動脈硬化症（4）高血圧と動脈硬化症</p> <p>第14回：動脈硬化症（5）動脈硬化症の治療、予後</p> <p>第15回：まとめ</p>			
<p>準備学習：</p> <p>授業前には資料を全文和訳してくること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>特になし。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>適宜英語文献を使用する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点、面接による期末試験およびレポートにより評価する。</p>			

授業科目名：食品管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：宮尾茂雄
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>食品の品質保持および安全性確保に関する専門的知識を修得するとともに食品の品質保持に関連する研究や食品の流通管理を行う上で必要な高度な知識を応用することができる。修得した専門的知識を基に対象となる食品の品質保持、安全性確保を操作することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>食品の安全性確保、品質保持を図るための知識の習得、様々な食品の特性に対応した食品管理の在り方について、食品製造工程における危害分析、重要管理点、モニタリングに関する専門的知識を修得する。また、食品の安全性確保において重要な位置を占める微生物の生態および制御方法に関する高度な専門的知識について深く理解し、能力を高める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：食品の安全性確保、HACCPについて</p> <p>第2回：食品製造工程における食品危害分析（生物的危害）</p> <p>第3回：食品製造工程における食品危害分析（化学的危害、物理的危害）、異物混入</p> <p>第4回：食品製造工程における重要管理点とモニタリング</p> <p>第5回：微生物の生態と環境条件</p> <p>第6回：微生物の汚染とその対策</p> <p>第7回：静菌の概念と意義</p> <p>第8回：温度、脱酸素剤による微生物制御、品質保持</p> <p>第9回：pHの調節と浸透圧・水分活性の利用</p> <p>第10回：化学的保存技術の概念と意義</p> <p>第11回：天然物由来物質による食品保存</p> <p>第12回：洗浄の概念と意義</p> <p>第13回：ろ過の概念と意義</p> <p>第14回：殺菌の概念と意義</p> <p>第15回：加熱殺菌と化学的殺菌</p>			
<p>準備学習：予習1時間、復習・ノート整理1時間</p> <p>保存食品開発物語（スー・シェパード、赤根洋子訳）を事前に読んでおく。</p>			
<p>テキスト：授業ごとに資料を作成、配布し、それに基づいて授業を行う。</p>			
<p>参考書・参考資料等</p> <p>「食品微生物学ハンドブック」、「食品製造の微生物管理マニュアル」</p>			
<p>学生に対する評価</p> <p>平常点20%、小課題30%、レポート提出50%</p>			

授業科目名：生活情報処理特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：松木孝幸
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>統計の概念を理解し、実データを与えられたときにどのソフトを使用しても統計処理ができること。データをデータベースに格納していつでも利用できるようになること。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人間生活学の研究を遂行してゆくために必要となる情報あるいはデータの取り扱い方、得られたデータに対する統計学の利用（統計処理）あるいは方法論について述べる。具体的には、データをデータベースに格納する方法と利用方法、多変量解析における重回帰分析のやり方を学び、多くの変数に依存したデータの解析方法を学ぶ。さらにパソコン上ではExcel、SPSSなどを利用してこれらの方法論がどのように実現されるかを学び、具体例を用いて生活情報処理に必要な知識を習得する。</p>			
<p>授業計画 クラウドの利用が身につくような授業形態にする。</p> <p>第1回：データの分析と可視可（確率による円周率の導出）</p> <p>第2回：データの分析と可視可（サイコロの目の偶奇性と確率）</p> <p>第3回：代数ソフトによる可視可（Mapleによる数値計算）</p> <p>第4回：代数ソフトによる可視可（Mapleによる代数計算と描画方法）</p> <p>第5回：Excelによるデータの統計処理（ポアソン分布）</p> <p>第6回：Excelによるデータの統計処理（正規分布）</p> <p>第7回：Excelによるデータの統計処理（検定の考え）</p> <p>第8回：SPSSによるデータの統計処理（データの作成と保存）</p> <p>第9回：SPSSによるデータの統計処理（基礎統計量）</p> <p>第10回：SPSSによるデータの統計処理（クロス集計と検定）</p> <p>第11回：SPSSによるデータの統計処理（回帰分析）</p> <p>第12回：データベース実習（SQL文によるデータの抽出）</p> <p>第13回：データベース実習（PHPによるホームページの記述）</p> <p>第14回：データベース実習（SQLとPHPとHTMLの関係）</p> <p>第15回：データベース実習（ホームページでのデータの表示）</p>			
<p>準備学習：</p> <p>基本的な用語、操作については承知しておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>適宜指示する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>SPSSによるやさしいアンケート分析</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点、レポート</p>			

授業科目名：研究指導 特別研究	単位数：	必修	担当教員名：23名
<p>授業の概要</p> <p>高度の専門性を求められる本専攻においては、人間生活科学に関わる最新の研究成果に基づいた研究の 実践、指導を行い、得られた成果のとりまとめと論文指導を行う。</p> <p>(峯木真知子)</p> <p>ライフステージ別栄養に合った、あるいは病気予防の食事を考え、実態調査を行い、物性および嗜好面 から調理食品をその機能性・調理・食味特性を理解し、開発および提案する。調理科学的研究に加え、 栄養アセスメントを含めた研究を実施する。</p> <p>(藤森文啓)</p> <p>食品中の遺伝子の使われ方、また食品微生物他ウィルスなどの機能解析を目的として、分子生物学的な 手法で研究を行う。</p> <p>(井上俊哉)</p> <p>各自の関心に合致する心理学研究を数多く読み込むことから始める。そして、先行する研究で明らか になっていること、未解決な問題を整理した上で、オリジナルな研究を構想する。</p> <p>(潮田 ひとみ)</p> <p>衣服の着用快適感を決定する要因の解明、特に、環境－衣服－人間系での熱・水分移動特性と評価方法 などに関する研究指導を行う。</p> <p>(榎沢良彦)</p> <p>保育における子どもと保育者の体験世界を探究することを通して、保育の質を向上させるための実践的 な研究を行う。</p> <p>(大澤 力)</p> <p>幼児期自然教育・環境教育・持続可能性教育における科学性の芽生えから問題解決能力の育成に関する 研究指導を保育・教育現場での実践研究も踏まえて行う。</p> <p>(大西淳之)</p> <p>月経随伴症状を女性にとっての周期的なストレスと捉え、症状の愁訴とストレス対処力としてのコピー レンス感覚 (Sense of coherence) との関係、および栄養生活状況を探る。</p> <p>(岡 純)</p> <p>糖尿病、脂質異常症、高血圧症、動脈硬化症などの生活習慣病の発症と栄養や運動などの生活習慣の関 わりや遺伝的背景について多面的な手法を用いて検討し、研究を進める。</p>			

(佐藤吉朗)

食品衛生において、しばしば問題にされる汚染物質を分析化学的に検査する方法を確立する。また、食品の品質において重要な成分の研究を GC/MS 法により実施する。

(澤田めぐみ)

COPD の全身性併存症である心血管病変について、血管内皮機能などの面から評価を行いその進行を予防する栄養学的アプローチについて研究指導を行う。また、肺高血圧に関連し予後の悪化を引き起こす肺血管床の組織学的再構築につながる炎症性要因について研究を行う。

(相馬誠一)

子どもたちの心の問題や学校をとりまく多くの課題について研究を深める。具体的には、「不登校」「いじめ」「非行」等の学校臨床心理学を中心とした研究を行う。

(高野貴子)

子どもの心と体の発達に関して、親からの遺伝的側面と、胎内環境を含めた環境的側面を多角的に分析し、健全な発達を阻害する要因と、それによって引き起こされる疾病や障害の実態の研究を行う。

(戸田雅美)

保育行為の判断の根拠について検討することを中心とする研究を行う。具体的には、実践事例を基にした研究や保育者を対象とする実践についてのインタビュー研究を行い、研究手法の確立にもつなげる。

(半澤嘉博)

共生社会づくりを目指した特別支援教育やインクルーシブ教育に関して、障害特性に応じた実践的な教育内容、方法、評価等の研究を行う。

(平山祐一郎)

心理学的な調査・実験的手法によって、幼児期・児童期・青年期の学習活動または言語活動について、その発達の様相を記述する、あるいは教育的介入の効果を検討する研究指導を行う。

(福井至)

主に不安障害や気分障害、および適応障害などに関する、新たな認知行動モデルの構築とそのモデルに基づく治療プロトコル開発、およびその治療プロトコルの効果検証に関する研究指導を行う。

(松木孝幸)

人間生活学を研究する上で得られたデータの評価方法として、データに現れる用語の頻出度を、時間変化を調査することによりそのデータの特徴を探る方法がある。これをデータベースと連携させる研究をする。

(三浦正江)

主に、心理的ストレスやメンタルヘルスに関するテーマについて、基礎研究やストレスマネジメント、SST、アサーショントレーニングなどの認知行動理論に基づく予防・介入研究を行う。

(宮島祐)

発達障害（神経発達症群）の子どもたちは一人ひとり異なる特性・才能を有しており、輝ける幼少期であることを願い「パステルゾーン」の捉え方を広く知らせ、適切な環境のもと健やかに育むために、医療・教育・福祉など関係諸機関がどのように連携し対応していくべきか研究する。

(森俊夫)

自然環境に目を向け、天然染料で染めた染色布の多機能性を追求し、合成染料で染めた染色布との色彩特性の差異を画像解析の方法を用いて定量的に研究すると共に、学会誌に掲載できる論文指導を行う。

(森田幸雄)

食品衛生の基本となる HACCP システム等を使用した食品衛生対策に関する研究および食品由来感染症の健康危害に関する研究を実施。その成果は国際雑誌に掲載できる複数の論文としてまとめる。

(小林理恵)

一次加工を施した地域特産食品を利用した調理品を対象に、その栄養成分、外観、物性、健康機能性、省エネ面からも最適な調製条件を追究するとともに、新規研究手法の開発の可能性も検討しながら研究を遂行する。

(濱田仁美)

天然繊維材料を対象として、改質及び機能化を行うことで、新たな機能性を有するテキスタイル素材の開発を目的とした研究を行う。物性評価や構造解析などの物理化学的アプローチによる研究指導を行う。